

大正区民まつり2025展示

藤永田造船所と谷崎潤一郎

2026年8月17日

大正区歴史を語る会

§ はじめに

大正区歴史を語る会では、毎年「大正区民まつり」に、ものづくり事業に協力していただきブース出展をさせていただき歴史に関する展示を行っています。

2025年10月19日（日）に開催された「大正区民まつり2025」では”藤永田造船所と谷崎潤一郎”というテーマで展示を行いました。
本資料は、今回の展示内容をまとめたものです。

大正区歴史を語る会
会長 御手洗賢秀

§ 展示資料について

他の展示物もあったため作成した資料は2枚だけですがまとめとして次ページ以降に掲載しておきます。

藤永田造船所

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

藤永田造船所（ふじながたぞうせんじょ）は、かつて大阪府大阪市にあった民間造船所。日本最古の造船所と言われ、日本海軍の艦艇や鉄道車両を製造していた。



山雲の進水式。1937年7月24日、藤永田造船所。

元禄2年(1689年)3月、大坂堂島船大工町(現・大阪市北区堂島1丁目)に船小屋「兵庫屋」として創業。安政元年(1854年)、紀州藩の御座船を受注したことを受け、江之子島敷屋町(現・西区江之子島1丁目)に移転する。開国以後、西洋式船舶である君沢型スクーナー船、木造外輪汽船の建造に取り組み、近代的造船所に脱皮した。1874年(明治7年)、西成郡岩崎新田(現・西区千代崎3丁目)に移転して藤永田造船所に社名を変更する。

1884年(明治17年)、大正区新炭屋町(現・大正区千島1丁目)に移転する。

1917年(大正6年)には東成郡敷津村(現・住之江区柴谷1丁目)に敷津工場(後の本社工場)を開設して設備の大規模化、近代化を進め、1919年(大正8年)11月に海軍指定工場となり、初の海軍艦艇建造となる駆逐艦「藤」を受注した。

造船業の他、1921年(大正10年)からは鉄道車両製造、鋳鉄管製造、化学工業機器製造など多角化を進めた。1926年(大正15年)5月、敷津工場を本社工場とし、元の本社工場を新炭屋町工場に改め、敷津工場の対岸にあった大正区船町の船町造船所を吸収合併して船町工場(現・大正区船町1丁目)を設立する。

太平洋戦争が始まると駆逐艦の増産が行われ、1944年(昭和19年)1月に軍需会社に指定される。同年12月の時点で従業員は16,508名にものぼり、大阪では大阪陸軍造兵廠、住友金属工業に次ぐ人数となった。

戦前においては、日本海軍との関係が強く、そのことで昭和金融恐慌などの経営危機を乗り越えたが、1945年(昭和20年)6月1日の第2回大阪大空襲により被災し、戦後は漁船建造から再出発した。明治海運を中心とした同型貨物船建造、LPG船建造などを行った。1962年(昭和37年)10月、化工機部門を分離して藤永田エンジニアリングを設立する。

造船業の他、製油精製装置、産業機械などの製造部門にも力を注いできたが、1967年(昭和42年)10月に企業競争力の強化のため同じ銀行融資系列の三井造船に吸収合併される。

1977年(昭和52年)3月には藤永田エンジニアリングも三井造船エンジニアリングに吸収合併され、兵庫屋時代を含む藤永田278年の歴史に幕を閉じた。現在は、工場敷地の大半が再開発されている。なお、敷津工場の東隣には名村造船所があった。

藤永田造船所と谷崎潤一郎・松子

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

谷崎潤一郎 (たにざきじゅんいちろう)

日本の小説家。明治末期から昭和中期まで、終生旺盛な執筆活動続ける。1886年7月24日 - 1965年7月30日



木村伊兵衛撮影 (1950年)

谷崎倉五郎、関の次男として東京市日本橋区蛸殻町二丁目14番地(現・東京都中央区日本橋人形町一丁目7番10号)に誕生。幼いころから才能が評価されていた。東京帝国大学文科大学国文科に進み、在学中戯曲『誕生』や小説『刺青』(1910年)を発表。

関東大震災の後、谷崎は関西に移住。長編『痴人の愛』は大きな反響を呼び、続けて『卍』、『蓼喰ふ虫』、『春琴抄』などを発表。

1935年(昭和10年)に、森田松子と3度目の結婚をして私生活も充実する。太平洋戦争中、谷崎は

松子夫人とその妹たち四姉妹との生活を題材にした大作『細雪』に取り組み、軍部による発行差し止めに遭いつつも執筆を続け、戦後その全編を発表する(毎日出版文化賞、朝日文化賞受賞)。同作の登場人物である二女「幸子」は松子夫人、三女の「雪子」は松子の妹・重子がモデルとなっている。

戦後は高血圧症が悪化、しかし、晩年の谷崎は、『過酸化マンガン水の夢』(1955年)を皮切りに、傑作を発表。1950年代には『細雪』、『蓼喰ふ虫』が翻訳され、アメリカでも出版。ノーベル文学賞の候補に何度も選ばれ、特に1960年と1964年には最終候補の5人の中に残っていた。最晩年の1964年(昭和39年)6月には、日本人で初めて全米芸術院・米国文学芸術アカデミー名誉会員に選出された。

谷崎松子 (たにざきまつこ)

谷崎潤一郎の3人目で最後の妻、随筆家。『細雪』の幸子のモデル。1903年9月24日 - 1991年2月1日



娘の恵美子(左)とともに(1949年。円内は夫の潤一郎)

藤永田造船所の社主・永田三十郎のはとこに当たる同社専務の森田安松(1864-1928)の四人姉妹の次女として1903年、大阪府大阪市大正区(1903年当時は大阪市西区新炭屋町)に生まれる。

20歳で根津清太郎と結婚。清太郎は根津商店という大阪の綿布問屋の御曹司であり、彼とのあいだに一男一女をもうけたものの、夫は末の妹と駆け落ちするなど素行が悪かった。1927年、関西移住中の谷崎潤一郎と知り合う。

1934年、松子と清太郎離婚。松子と谷崎は芦屋で同居するようになる。当時、松子は谷崎の崇拜の対象であり、『盲目物語』『春琴抄』その他の女人崇拜の作品は松子を念頭に置いて書かれた。

戦後高血圧に悩んだ谷崎を支えたが、1965年初の随筆を発表した後谷崎が死亡し、以後随筆家として活動した。